

森 一久

◆ウワン氏による只今のフランスでの状況のご説明は大変行き届いていて、我々にも参考になるもので、感謝する。我が国でもちょうど今、ICRP60を安全規制にどうとりいれるか、つまり現行の規則を変更すべきか、について放射線審議会（総理大臣の諮問機関）で検討中である。

日本の現行基準はOHP1の通り、貴国のよりすでに大分きびしい。日本ではいつも、「放射線安全の権威者から構成された中立機関」のICRPの勧告に、安全係数を掛けて国の基準とし、現場ではさらにそれを大幅に下回る状況で操業してきた。その上関係者は、この事をあたかも「安全の証し」のように、大衆やマスコミに説明してきた。しかし、ICRPの90年勧告自体相当低い値を示しているの、やたらと安全係数をかけるという、常套手法で安易な引き下げをすると、現場で仕事が出来なくなる恐れがあり、現在（水面下で）議論が紛糾している。今日伺ったフランスの考え方を、適切な方法で、日本での審議に反映したい。

◆日本での（他国でも同様のようだが）この「膾（ナマス）を吹く」ようなやり方は、むしろ放射線への恐怖をあふめる結果となっているが、そこには三つの問題がある。

まず①ICRP勧告についての意図的或いは善意の誤解、ならびに数字の意図的乱用、②ICRP勧告の科学的根拠と基本的考え方についての疑問、③広島・長崎およびチェルノブイリに関する疫学調査についての一部学者やマスコミの無神経かつ誇大な発表と報道、の三点である。なおこの三つは、相互に関連がある。

①についての主な点は、ICRPがあたかも「どんな少量の放射線でも害がある」と言っているかのように誤解あるいは援用している人が、原子力の賛成・反対の両方にいうことである。

②については、フランス科学アカデミーの昨年の報告は立派なものである。質問；今後のこの報告の扱いは？（若干のコメントー呼吸の影響、 α 線の閾値OHP2枚など）

③については、小児甲状腺への影響（これも放射線のためかは未解明）以外には被害はでていない。このことがまったく報道されない。（広島と比較して、線量率も総線量もチェルノブイリの方が低いことから、始めから判っていたことOHP）

◆放射線のリスク評価を常識的なものに戻すことが不可欠。原子力関係者は、誤解を受けない思慮深いやり方で、心ある学者の結集などの努力をすべきである。